

QI

Chisato Maki

Qualitas Interview

医療法人孝友会榎眼科医院

院長 榎 千里

人生は一度きり。前を向いて生きる。

明治 37 年に祖父である初代院長が開業して以降、120 余年にわたり地域の眼の健康と豊かな生活をサポートしてきた医療法人孝友会榎眼科医院。2015 年に父である先代院長の突然の死により、急遽事業を継承した榎千里理事長は、「心志」という言葉を大切に患者一人ひとりに対して真摯に向き合ってきた。

INTERVIEW BY Misaki Henmi TEXT BY Mitsue Yoshida
PHOTOGRAPHS BY Shuji Yamaguchi DIRECTION BY Mariko Ooyama

Qualitas Interview

志があるからこそ、夢や希望に出会える。
「心志」という言葉を大事にしてほしい。

「外科から眼科へと専門を変え、先代院長が亡くなったことで、急遽事業を継承することになったとお聞きしました。継承当時は大変なことも多かったそうですね。」

父が亡くなった翌日から喪服のうえに白衣を着ての診察が続いたこともあり、当時はとにかくバタバタでした。代々続いている眼科ですので、患者さんも昔から通ってきてくださる方ばかり。もちろんスタッフも一緒に年を重ねてきているので、患者さんからの信頼感という面では安心がありましたが、医療というのは何よりもチームワークが大事。そこには、定年間近のスタッフもいましたので、私についていくかどうか、悩んだ人も多かったと思います。

ですが、なんとかお互いに歩み寄っていきました。そうして、今も変わらずに長く勤務してくれるスタッフたちには感謝しかありません。

—— スタッフとの関係性で大事にしていることはありますか？

外科を辞めたあと、眼科に飛び込んだ私に父がかけてくれた言葉「誰も欠けてはならない。みんながいなきゃいけないだろう」を今も大切にしています。当初、外科上がりだった私は人を見る目線が通っていたので、その言葉にあまりピンときていませんでしたが、個人の役割というのは非常に重要。できる、できないで人を選ばず、効率よく仕事をしてもうためにどうしたらいいのか。結論から言えば、誰一人欠けてもよくないということにたどり着きました。例えば、





CHISATO MAKI

川崎医科大学を卒業後、お茶の水女子大学眼科病院、埼玉医療センター眼科、西葛西井上眼科病院での勤務を経て、明治37年に初代院長の「横 清太郎」が開設した医療法人孝友会の理事長を2015年に継承。地域に根差した眼科医療を提供している。

Qualitas Interview

たまに休んで「やるぞ」とスイッチを入れる。
人生には波が必要だから。

——先生は「心志」という言葉を大事にされているそうですね。
私がずっと大事にしてきましたのは、もちろん「心志」もですが、最近「心志」という、ある言葉にたどり着きました。心は丸く、志は強く、合わせて「心志（しんし）」という意味です。
ご縁を大事に、志を持つ今の自分にとって、なんだかしっくりくるなあと。

——どういったところから個性を見極めていこうとしたのでしょうか。
これは父と通う点だと思いましたが、まずは、スタッフの観察をしながら、性格や癖を知るように努めてまいりました。そうすることで今日は調子が悪いのかな、というところも見抜けるようになることもあります。とにかく、バランスよくスタッフの状況を把握しながら、モチベーションにかなうような行動や声かけを通して、生き生きと明るい職場環境を作ること大切にしています。

定年を迎える60歳になると仕事に差が出てくると思いますが、そんな先入観は持たなくても大丈夫です。当院には0歳から110歳まで、さまざまな年齢層の患者様がいらつやいます。同じように年齢を重ねたスタッフがおりますと、患者さんも安心していらつやとお話をしてくださり、円滑なコミュニケーションが取れるんです。父のもとで切磋琢磨して残った貴重なスタッフたちですから、きっと大丈夫と、スタッフ一人ひとりの個性を見極め、効率よく仕事をしてもえるようにしています。

——今、思い描いている夢や希望はどういうものなのでしょう。
事業に関しては、シークレットです（笑）。と言っても眼科の新たな構想は年々始まらつくりと案を考え、その年の秋に年やりたいことを決める形なので、そんなに大仰なことではありません。今取り組んでいることとで、新しいことという感じです。笑を言うのと、あまり先のことは考えていないんです。前世も来世もないのだから、人生一度きり、今を大切にしながら生きていくこと。そして、その結果として夢や希望があるのだと私は思っています。

——今を大切に、という考えは以前からお持ちになっていたのですか？
2年ほど前に出会った方が言葉がきつかけでした。当時、ホルモンのバランス崩れるくらい働かずくめの毎日だった私は、「来世はね」というのが口癖だったんです。そのときに「来世はないよ。人生は一度きりなんだから」と言われ、当たり前のことかもしれませんが妙に納得してしまつた自分がありました。過去の自分について反省しなくちゃいけないことは山のようにあるかもしれないが、過去に振り回されることなく今をしつかり歩いていきたいなと思直したんです。

また、そのタイミングで生活スタイルも変わりました。働き続ける毎日から自分を見つめ直す時間を意識的に作るようになっていったんです。仕事も趣味も楽しむのが私の希望ですから、患者さんにも「不安定な先のことはかり考えていると身動きが取れないんだから、今できることをやりましよう」と伝えています。

——最後に、若い方々へ向けたいメッセージをお願いします。
今は情報化社会です、より自己主張をしつかりとすべきだと思います。とはいえ、今の若い方はよくしつかりされていますよね。街頭インタビューでも、感受性の高い世代である学生の方々がこんなことを発言するの？というところもよく見受けられます。ですので、そういうところはより伸ばしていきたいです。年齢問わず、道徳モラルを持つことが今後はさらに大事になってくるのではないのでしょうか。スタッフにも汚い言葉は使わないように指導していますが、それは必ず自分に跳ね返ってくると思つていからです。私の言っていることが全く正しいわけではないですが、「すぐ30歳は重なるものですね。もう30、もう40か、もう50くらい（笑）。20代とだけ自分がサボっていたか、ということと、人生はとんとんとく言いますが、波があるのだから、常に頑張り続けろ、とは言いません。たまに休んでオフの日をいれて、「やるぞ」というスイッチを入れる。そのうえで、今を大事にすることが人生では重要なことと感しています。